

## 瞥見 天津仏教事情

横久保 義 洋

筆者は平成二十四年九月十五日から同年十二月二十三日まで、中華人民共和国天津市の南開大学歴史学院（学部）において在外研修の機会を持った。本稿ではその時期に体験した現代中国の仏教をめぐる新動向について簡略ながら報告を行いたい。

まず、歴史学院で行われているいくつかの授業を傍聴することを許されたが、その中でも直接仏学に関わるものとしては、著名な宗教思想史家である張栄明教授（筆者の兄弟子）による本科（学部）生対象の「中華国学」という講義の中で、「第十三講 仏教禪学」「第十四講 仏教唯識学」として、計二回にわたり取り扱われたことが特筆に値しよう。内容としてはいづれも入門的・概説的なものであるが、学部一、二年生の、しかも必修科目として仏教の基礎知識が教えられること、しかもそれがいまやマルクス主義に代替するものとして、国家の最重要学術思想とさえ看做されつつある「国学」の一環として捉えられていることは将来の現代中国の進路を占う上でも注目すべきであろう。

この「中華国学」では、各回の最後に「賛に曰く」として恐らく教授の自製と思われるが、その内容のまとめが偈頌のような形で披露される。この仏学関聯の講義ではそれぞれ「漸悟與頓悟、念佛和止觀。佛國千條路、條條通涅槃（漸悟と頓悟と、念仏と止觀と。仏国千条の路、条々涅槃に通ず）」「色聲香味觸、眼耳鼻舌身。五塵入五門、塵霞如來心（色声香味触、眼耳鼻舌身。五塵五門に入れば、塵霞もまた如来心）」

というものであった。

研修期間中、市内各所の宗教施設にも触れる機会がたびたびあった。「国学」の核心とされている文廟（孔子廟）などの儒教施設はいうまでもないが、特に古文化街と呼ばれる、清代の町並みを保存・復元した一角にある天后宮という道観（道教寺院）は古跡として著名である。またモスクやキリスト教の教会なども市内に夥しくあり、それぞれ法の範囲内で積極的な宗教活動を行っていたが、これらは筆者の当面の関心外であるので深くは考察しなかった。ここでは寺刹や仏教関連史跡等の参拝・見学についてのみ触れることとする。

まず十月十三日（土）、午後三時頃から海河のほとりに位置する大悲禅院（河北区天緯路四〇号）参拝。創建は明末清初に遡るが、現在の規模になったのは一九四二年、天台宗第四十四世教観総持である倭虚大師（一八七五—一九六三）による復興によるものである。総敷地面積は約四万二千平方米、数々の伽藍が立ち並んでいるが、特に天津市仏教協会の本部も設置されており、同市の仏教の中心ともなっている。山門を通り順に天王殿、釈迦堂に参拝。釈迦堂には明代に铸造された釈迦像が供養せられている。さらにその先には同寺最大の建物である大雄宝殿が鎮座しているが、上層に「護國佑民」と大書してあるのが印象的であった。殿前には向かって右に清初の大儒である朱彝尊撰「大悲院記」、左側には来新夏（南开大学歴史学院教授）撰「天津大悲院沿革記」の石碑が置かれていた。現在はこの大雄宝殿が同寺の一



番奥（東北方）の伽藍となっているが、近い将来さらにその裏手に蔵経閣や方丈を建設する計画であるという。

殿内に入ると中央に釈迦像、その左（東側）に薬師佛像、右（西側）に阿弥陀佛像が安置されている。この国の通例にならない、五体投地の礼を以て拝す。

大雄宝殿の前には李鴻章が奉納した鉄製の五重の塔が建っており、鐸鈴が風に揺られるたびに鏘鏘たる音を奏でていた。いささか脚が疲れたので、近くのベンチに座り休憩がてら参拝者の様子を見てみると、日本の神社とはいささか趣きが異なっていることに気が付いた。まず参拝者の大多数が老人ではなく若い——とりわけ二十代・三十代と思われる人々であるということである。それに、この国の名所旧跡でしばしば見受けられるような物見遊山気分の方は一人もなく、一心不乱に焼香・参仏している者がほとんどであり厳肅な気分がただよっており、写真を撮るのものはばかられるものがあった。

境内の西半分は倭虚大師の重修以前からあった部分である。大悲殿には唐代の二十四臂観音像や釈尊の生涯を描いた壁画があったが、その他、この区画には倭虚法師舍利塔・同記念堂・弘一法師記念堂、それに一時期同寺に玄奘三蔵の舍利が納められていたことによる玄奘法師記念堂なども擁している。

売店で寺の写真集と「弥陀浄土」と題する読経DVDとを購入後、寺を出る。門前は広場になっており、東側には仏具店や土産物店などの門前町（閉まっている店舗が多かった）、南には韓国資本のショッピング・モールが広がっていたが、西に狭い露路に屋根をかぶせた市場のようなものがあったので入っていくと、何と八卦見や人相見、それに風水師等が店を構えひしめきあっていた。勿論、種々の仏具を扱う店もいくらかはあったが、大部分はそれらの仏法と如何なる関係があるのか理解に苦しむような業種であり、



客が通りかかるたびに口々に声を上げて呼び込もうとする。易者の客寄せなど初めて見た。

山門の前で、一人の老婆が参拝客になにやらパンフレットのごときものを渡している。受け取ってみると遼寧省の医巫闾山いふりまさんに祀られている「歪脖老母わいぼつらうぼ」なる女神（「観音菩薩の化身」だそうだが…）の靈驗譚集とその聖地参拝ツアー（天津より十一日に一回バスが出ていている由）の案内であった。明らかに仏道混淆・現世利益（「有求必應」というフレーズを至るところで見かけた）中心の迷信めいたものであるが、民衆レベルでの仏教理解の一端が窺えて研究対象としては興味深いものがあつた。

十二月二日（日）この日は朝から霧が出て、気温も零下五度くらいまでしかなかったが、午後からタクシーに乗り、掛甲禅寺（河西区新围堤道一号）に参拝。この寺の由来は古く、唐の貞観年間に尉遲敬徳うぢけいとくが高句麗討伐の帰途この寺に寄り（当時は慶国寺という名称）、身にまもっていた甲よろいを掛けて去ったという伝説からその名に改まったともいわれるが、はっきりとした歴史は明代からである。山門は北側の道路に面しており、彫刻が施された影壁を廻ると南向きに境内が延びているが、東西および南にもまた地藏堂・羅漢堂等の堂閣が立ち並び、境内の真ん中にある天王殿、大雄宝殿をコの字状に挟み込ん



でいるといったやや風変わりな伽藍形式となっている。

天王殿の前後には玉製の観音像や弥勒像がある他、西側の五百羅漢堂には大きな涅槃臥像のまわりに種々様々の表情をした等身大の極彩色の羅漢像が並んでおり、中には顔の黒いのや蒼いのもあった。これは何を意味しているのだろうか？

羅漢様を拜んだ後、机の上に色々と書物やらパンフレットやらを置いていた。最初は販売物かと思ったが、弘法のため無料で好きだけ持って行って良いのだと言う。流石にいささか気が咎めるので、心ばかりの喜捨をした後十部ほど選び、それに仏画もあわせて有難く頂戴することにした。この時に得た仏典の内訳は以下の通り。

了凡四訓精解編

地藏菩薩本願經

三世因果經解說

佛說療痔病經

佛說咒時氣病經

佛說大乘無量壽莊嚴清淨平等覺經

佛說長壽滅罪護諸童子陀羅尼經



金剛般若波羅蜜經

切莫誤解佛教

早晚課

淨宗朝暮課本

これらの内、最後の三種についてはいささか説明を要するであろう。『切莫誤解佛教』は印順法師（一九〇六一二〇〇五）が菲律賓フィリピンの華僑中学で行った法話をまとめ、世人の仏法に対する種々の誤解に基く批判に反駁したもの。弘一大師の「仏法大意」が附録されている。『早晚課』（浄空法師作）は内題に『阿弥陀仏十念必生法』とあるように専ら阿弥陀仏への他力念仏を説いたもの。最後の一部は中国浄土宗で日々読誦する課業本。このことからわかるように、「禪寺」と称しながらも実質上、「禪浄双修論」（藤吉慈海『禪と浄土教』参照）によって、浄土教がこの国の仏教の中心となっているのである。

その他、市内の薦福観音寺や蓮宗寺、また郊外の薊けい県の独楽寺や天成寺、浜海新区の潮音寺など、天津には現存するものだけでも多くの名刹があるが、残念ながら今回の研修中には拝観の機を得なかった（天成寺には二十年前に参拝）。

寺院のみならず、近代史の舞台となった天津には、その時代の仏教関係の遺跡も多く残っている。例えば、旧城の東南角には民国年間に居士仏教の信仰・研究の中心たることを期して靳雲鵬きんうんぱう・孫伝芳等の政界の有力者により設立された居士林があるが、ここはとりわけ一九三五年十一月十三日の敵討ち事件——孫

伝芳暗殺の舞台ともなったのであった。それ以上に著名なのが、本稿でもたびたび名前を出してきた同市出身の弘一大師（俗名 李叔同。一八八〇—一九四二）にまつわる史跡である。大師の生涯は近年『一輪明月』という映画にもなり日本でも知られるようになってきたので詳しい紹介は省くが、在俗時は近代美術・音楽史、それに演劇史上における草分け的存在として、また中年にしてあらゆる栄達・名声を棄て突如出家してからは南山律宗中興の祖としても巨大な足跡を残した人物であり、天津市民の誇りとするところである。実は、今回の研修の主な目的には彼の足跡を辿り、資料蒐集を試みることも含まれていたのである。

十月二十三日重陽節、河北区の中山公園に遊んだ後、午後三時に李叔同書法碑林（河北区宙緯路）を訪ねる。院子（中庭）の池にかかっている石橋を渡ると、大師の石像が安置されている。大師像を拝したあと、庭を取り囲んでいる壁一面に大師自身やその瞻仰者―多くは現代中国仏教界を代表する高僧・居士、そして著名書家・画家―の書作品が刻まれた石板が貼られているのをゆっくり



りと巡りながら鑑賞。この場所は周恩来総理が若かりし時に同志とともに結成した革命結社・覚悟社の史跡でもあった筈であるが、そちらの要素を示すものは看板以外に何も残っておらず、ひたすら大師を称える展示物ばかりだった。

帰国も目睫に迫った十二月二十二日、友人とともにようやく大師の生家跡の李叔同故居纪念馆（河北区浜海道）を見学することができた。実はこれまで平成二十年と二十二年にもここを訪ねたことがあったのだが改修中であつたり閉館していたりして、いずれも入ることができなかつたのである。今回ようやく三度目にして宿願を果たしたことになる。

門を入ると大きな築山とすでに凍りついた池があり、右手の亭内に大師像が座している。辺りではスピーカーで大師が在俗時に作詞した『送別』、すなわちJ・P・オードウェイ作曲の *Dreaming of Home and Mother* —— 「ふけゆく秋の夜」の『旅愁』といった方が日本では通りがよいかも知れない——が流れていた。

さらに進むと、当時天津有数の富豪であつた大師の生





家の建物が鱗庇しており、その中に彼の生涯を振り返る事物や写真、そしてその書蹟などが展示されていた。なにかんづく「念佛不忘救國」と記されているのを見てやや複雑な思いを抱きつつも「真の仏者たるものはこうでなければならぬ」と非常な感銘を受けたのである。研修の最後を飾る、洵に有意義な探訪であった。

大学内外を問わず大抵の書店には必ずと言ってよいほど仏教関係の棚が充実していた。禅・浄土のみならず弘一大師や現存する大陸・台湾の高僧や居士の文集や語録、それに蔵伝仏教に関する図書もかなりあり、とりわけ達頼喇嘛の詩集や伝記などは特に若い人々によく読まれているらしく何種類も置かれていた（ただし十四世でなく六世）。また「図書大廈」という市内一の大型書店（河西区蘇州道）の音像売り場には「仏楽」のコーナーも設けられていて、漢語のみならず蔵伝仏教の西蔵語や蒙古語、それに梵語や巴利語の経文・音楽CD・DVDなど各種取り揃えて販売されていた。街中の喫茶店に入っ



ても仏教雑誌や書籍が置かれていたりする。この三十年間、この国の仏法は総じて党・政府の「保護」や「監督」を受けつつ復興を遂げてきたわけであるが、もはや必ずしもそれのみでなく民間の努力により自律的な発展へと向う気運が整いつつあるといっても良いのではないか。我が国の現状を顧み、心中嘆じざるを得ないのであった。

白河の動き流れに風吹けば法をつたふる鐘の音きこゆ

古の唐人の跡訪ひて皇國の民の道標懐ひつ